

オケのテイキは、おもしろい

2015年4月横浜定期版

オヤマダアツシ (音楽ライター)

マイケル・スペンサー (コミュニケーション・ディレクター)

昨シーズンから始まったマイケル・スペンサーさんの音楽ワークショップ『オケのテイキは、おもしろい』。4回目となる今回は初めて横浜定期演奏会の直前に行われ、定期会員の方々を中心に約25名の方が集まった。過去3回はそれぞれ、大学生、小学生、そして東京定期演奏会会員の皆さんと共にわれ、モチーフとなった作曲家や曲から、新しいオリジナルの音楽を創造するというスタイル。しかし今回は楽器などを使用せず、音楽の「しくみ、構造」などを理解しながら迫ろうという新しい試みだ。

今回のテーマは、生誕150年を迎えているジャン・シベリウス。4月18日に行われたピエタリ・インキネン指揮の横浜定期演奏会(シベリウス・プログラム)を、より楽しむためのワークショップである。題して『どうしてシベリウスはシベリウスのように聞こえるの?』。

まず最初に、シベリウスが生きた時代背景や彼を取り巻く状況、そして何が彼の

インスピレーションを刺激したのかを知ることから。長い期間、他国の支配を受ける中で生まれたフィンランドの愛国心、大自然、ワーグナーからの影響、そして何より『カレワラ』というフィンランド独自の文学作品に出会ったことなどが写真と共に紹介され、シベリウスを理解するための第一ステージをクリアする。その中には『カレワラ』の各場面を描いた画家ガッレン＝カッレラの作品も紹介されたが、美しくも不気味なその絵画は、シベリウスの作品、特に『カレワラ』から生まれた『レンミンカイネン』組曲の理解に役立っただろう。

さて、ここからがマイクさん流ワークショップの真骨頂。全員が立ち上がり、輪になってフィンランド語による民謡を歌いながら踊る時間だ。まるで呪文のような歌を覚えながら、歌詞(言葉)のリズムをつかまえ、ところどころに強めのアクセントを付けながら歌っていくのだが、

それはフィンランド人であるシベリウスの体内に流れるリズムと同期するための試みなのだろう。



フィンランド民謡のリズムを全身で体感

さらにマイクさんは理解を促すため、やはり民族的な要素を自作へ取り入れたハンガリーのベラ・バルトークを紹介。バルトーク自身が100年ほど前に録音した民謡を聴き、その素材を生かした2つのヴァイオリンのための曲(「44の二重奏曲」より)をマイクさんと楽員の本田純一さん(第1ヴァイオリン)が演奏。民族的な要素と作曲家の創造力の関係、そして影響力などを少しずつ解明していく。



教材は生演奏!!

シベリウスはダイレクトに民謡を自作へ転用することはしなかったものの、

音楽の底に流れているのは『カレワラ』に宿るフィンランドの誇りであり、それが音楽を生み出す精神的な支えだった。マイクさんはロンドン交響楽団などに在籍時、何度もシベリウスの作品を演奏したようだ(イギリスのオーケストラにはシベリウス演奏の伝統がある)。そうした体験と知識をフルに生かしてスコアを解析し、シベリウスのオリジナリティを抽出して参加者にヒントを与えていく。たとえば『レンミンカイネン』組曲で使われる特徴的なリズムを参加者全員で再現し、「ペダルトーン」(第一倍音)と呼ばれるハーモニーの背骨のように重要な音を探すなど、まるで指揮者が楽員へリハーサルをしているような内容とクオリティだった。

さらにはマイクさんや日本フィルの楽員たちが、シベリウスの曲を演奏した際の印象や、今だから笑える失敗談などを披露。会場で配布されるプログラムノートでは得られない情報もたくさんあり、一気にシベリウスへと近づけたと言えるだろう。その記憶と知識は、シベリウスの違う作品を聴くときにも役立つはずである。

今回はこれまでと違った「拡大版のプレトーク」とでも言うべき内容であり、音楽ワークショップの新しい選択肢がまたひとつ生まれたとも言える。加えて参加した楽員からも「リハーサル前に曲の内容やしくみを知ることができ、理解が早かった」という声も寄せられた。ワークショップは今シーズンも数回行われる予定だが、さらに内容が進化するに違いない。